



海洋研究開発機構(JAMSTEC)は海洋に関する研究開発を行う国立の機関です。

「海の研究所」といっても研究分野の範囲は多岐にわたります。海流の変化を観察することで地球環境の「現在」を把握し、「将来」を予測する。海洋における物質の循環と資源の成因を理解し、海洋資源の持続的な利用を図る。地震や火山活動の実態を調査し、災害の軽減に繋げる。応用や社会実装を想定した研究のみならず、生命の起源や自然現象の解明といった有機生命体の神秘を解き明かすための挑戦的な研究にも取り組んでいます。私たちは、政策者・国民・産業といった社会を巻き込みながら、研究者、技術者、事務職員が一体となって海洋・地球・生命の理解に挑戦し、人類社会と地球の未来に貢献することを目標としています。

TO JOB SEEKER

JAMSTECからのメッセージ

世界最高水準の 研究を体感する

海洋研究開発機構(JAMSTEC)は、海洋国家の日本において、海の研究を通じ、科学技術の向上・学術研究の発展・地球や生命の理解などに広く貢献するための活動に取り組んでいます。海洋研究への情熱、最新の研究に触れたい。感じたい。共に進めたい。そういう想いをお持ちの方を、私たちはお待ちしております。



THOUGHT 01

職種の壁を超えて協力し目標を達成する

JAMSTECには研究者の他に事務職・技術職・海事/海技職(船員)といった職種の職員も在籍し、それぞれが大小様々な複数のプロジェクトを遂行しています。業務の全てを機構内だけで完結させているわけではなく、外部の関係者からの協力もいただきながら実施しています。限られた人員・予算を最大限に活用し、プロジェクトに関わる多様な立場の人の考えや方向性を理解し一致させ、世界最高レベルの研究成果を目指しています。

THOUGHT 02

必要なのは主体性と自分の言葉

JAMSTECは2021年に創立50周年を迎えましたが、組織としてはまだ発展途上な部分もあり、常にスクラップアンドビルドを繰り返しながら成長しています。担当業務のみならず、JAMSTECの将来、海洋政策の未来、国内外の状況など、自分の外側の情報に敏感であること。中長期的な視点を持ち、将来的に何をどのように進めていくのが適切なかを模索すること。それを自分の言葉で提案し、周囲の意見に耳を傾け、アイデアをより良いものにしていくこと。私達職員にはそうしたコミュニケーション能力が求められます。また、そのための意見なら、論理立てて提案すれば必ず背中を押してもらえます。そういう組織文化が根付いています。入職間もない若手職員にも裁量と責任を与え、実践の中で大きく成長を促す。何事も楽しみながら物事を進められる人には、JAMSTECで過ごす日々が刺激的に感じるはずです。

THOUGHT 03

可能性がゼロでは無い限り挑戦する

調査・研究は、根拠や仮説を元に実施されます。ただ、その仮説が成立する可能性は必ずしも100%ではありません。しかし、可能性があるなら、トライする。もしも空振りだったとしても、狙いとは別の新しい発見があるかもしれない。就職活動も同じです。皆さんにとってJAMSTECは、「狭き門」「高いハードル」に思えるかもしれませんが、ここに集っているのは文系・理系、大学での専攻を問わず、「やりたいこと」「憧れ」に挑戦した人だけです。JAMSTECに少しでも興味を持っていただけなら、まずはその扉を叩いてください。お待ちしております！

INTERVIEW

職員インタビュー



【技術職】
北極域研究船推進部
総合推進グループ

田中 隆太
2018年度入職

私は、JAMSTECが所有する船の運用や整備、新しい船の建造に関わる技術者として勤務してきました。主に関わっているプロジェクトは、北極域研究船という新しい船の建造プロジェクトで、工程管理や船の性能、搭載する機器等が要求に合致しているか、求められる性能・機能等をどうしたら実現できるかについて、日々図面や色々な技術資料を確認しながら検討するという仕事をしています。

私は大学時代に船舶海洋工学を学んでいたことから、船、特に特殊な調査船に興味があったことと海洋の生物や気候などの研究にも興味があったなど、JAMSTECの仕事が自身の志向と合致していたことが入所の動機です。

今進行中の新しい船を造るプロジェクトはやりがいのある仕事ですが、達成感を得るのは正直実際に船が出来上がってからだと思います。

今のプロジェクトに携わる前は3年間程、既にJAMSTECが運航している船の整備や改造等に携わっていました。研究者から「こんなことをできるようにして欲しい」といった要望をヒアリングしながら、メーカーさんとどう具体化して実現するかを改造に向けた協議を続け、実際に改造が完了した後に研究者から「とても良くなったね」と言っていた時に達成感を感じました。

私の仕事は、研究者のニーズを正確に掴むために、研究そのものに対してある程度深い理解が必要になります。また、外部の専門機器メーカー、造船メーカーといった深い専門知識を持った方と何がしたいか、何ができるかを話し合う。つまり、研究者とメーカーの橋渡し役であり、通訳者という側面があります。そのためには、日々知識のアップデートが不可欠です。新しく入ってくる方も、そういう方が入ってくれば、お互い刺激になるのではないかと期待しています。

コミュニケーションを円滑に取るために共通の言語を学ぶという意味では、知識のアップデート自体がコミュニケーション力の一つだと思います。その積み重ねが、研究者や外部の方からの信頼を得ることに繋がる。私はこれからも信頼される職員で在りたいと考えています。



TAKAKI
NISHIO

【技術職】
付加価値情報創生部門
国際海洋環境情報センター
データ基盤技術開発グループ

西尾 貴樹
2019年度入職

※1 「深海映像・画像アーカイブス(J-EDI)」<https://www.godac.jamstec.go.jp/jedi/j/>

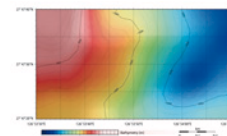
※2 「津軽海峡東部海洋レーダーデータサイト(MORSETS)」
<https://www.godac.jamstec.go.jp/morsets/j/top/index.html>



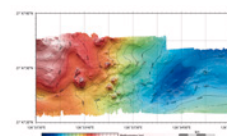
【海事職】
研究プラットフォーム運用部門
運用部
船員チーム

武藤 大也
2023年度入職

私は、技術職として2017年からJAMSTECに勤めています。主な業務はAUV※1の開発・改造です。AUVの主なミッションは「ソナー」を使用しての海底地形の調査です。AUVは水深数千メートルの深海に潜ることが可能です。ソナーとは音響測深器で、ソナーから発信された超音波が海底に反射し、返ってくる時間を計測することで海底地形を計測します。一般的な海底地形調査には研究船が用いられていますが、AUVを用いることで、より海底に近い位置から調査が可能となり、高解像度の海底地形図を得ることができます。これがAUVを使うメリットです。



船舶から計測した海底地形図



AUVから計測した海底地形図

日本は排他的経済水域の広さが世界で第6位という、とても広大な海を持っています。排他的経済水域の深度別面積比は4000mまでが約50%、4000m超が約50%になります※2。



海溝型地震の長期評価結果※3

海底地震の調査は地震発生以前の調査も重要です。地震発生後の調査だけでなく、地震発生前の調査結果と比較することで「どのように変化したか」を確認することができます。

この仕事をしていると、「海の深さ」の基準が壊れてくるんです。日頃から水深数千メートルの話をしているわけですから、深海と呼ばれる境界となる水深200mと言われても「浅いな！」みたいな。職業病ですね(笑)。

私は高校生の時に乗船した帆船の体験航海で、巧みに船を操る航海士に憧れ、水産系の大学に進学しました。大学では、海洋調査の航海実習があり、波で船が揺れる中、サンプルの採取が成功し、研究者、乗組員、学生みんなが一丸となって喜びました。白鳳丸は世界中の海で、地球温暖化、地震、海洋生物と多目的な研究を行い、特に国内では数少ない北極海や南極海での観測も行っている大型研究船です。白鳳丸であれば、あの時ように観測の感動を味わうことができると思い、JAMSTECに入職しました。

航海中は、先任航海士と2名の甲板部員と共に航海当直に入り、船を操船します。観測が始まると、私が船橋当直主任として操船を行います。観測時は、風や潮の影響を受けながら、その場にとどまる、低速で移動する、一定の速力を保つなど特殊な操船技術が必要です。巧みに船を操る航海士になるべく、先輩方にご指導をいただきながら日々試行錯誤しています。

航海当直以外の業務としては、担当機器の整備作業や、航海に必要な海図や水路書誌、航海日誌の保守管理などを行っています。

研究目的によって観測する海域が異なるため、寄港地も様々で、外国の港に入ることもあります。それぞれの港で航海士としての知見を深めると共に、観光や現地のグルメを堪能するなど楽しみがあります。

海上ではスマートフォンが圏外になってしまいますが、船内にはインターネット環境が整備されているため、家族や友人に連絡を取ることができます。

乗組員は交代制で、2〜4ヶ月の勤務の後、1〜2ヶ月のまとまった休暇が取れます。また、年度末には1年間の乗船予定が決まるため、休暇の予定も立てやすいです。最先端の学術研究に携わることができ、やりがいや達成感を感じる職場です。私たちと一緒に学術研究を支える、この船でしかできない仕事をしませんか？



TATSUYA
ASO

【技術職】
技術開発部
海洋ロボティクス
開発実装グループ

麻生 達也
2017年度入職

※1 Autonomous Underwater Vehicle(自律型無人探査機)

※2 https://www.spf.org/opri/newsletter/123_3.html

※3 https://www.jishin.go.jp/evaluation/evaluation_summary/#kaiko_rank

INTERVIEW

職員インタビュー



【事務職】
海洋科学技術戦略部
広報課

市原 盛雄
2005年度入職

※1 <https://www.mext.go.jp/stw/series.html>
※2 <https://society5expo.jp/>

私は2005年に入職し、現在は組織全体の広報業務を担当しています。

まず、相手に自分の考えを正しく伝え、意の通りに理解してくれるかは、コミュニケーションの本質です。そのためにはどうするかを考えます。手段は様々で、正解は一つではありませんが、うまく伝われば物事がスムーズに流れるので、結果「仕事は楽しい」と感じます。

「伝える相手が誰か」が異なるだけで、本質は同じです。広報課では、海や地球を国民により広く正しく理解頂くにはどうするかを日々考えています。伝えたい相手に関心を持ってくれるかは次のステップですね。

日本は海に囲まれ、古くから海を利用してきた文化があります。貿易量の99.6%を海運に頼るなど、私たちの生活は海によって成り立っています。海を正しく知ることは、私たちの宿命ともいえます。そこで、どのようにしたらより多くの方に海を身近に感じてもらえるのかを考え、2021年に制作協力したのが学習資料「一家に1枚 海」※1です。

また同年、最先端の科学技術を国民に広く伝える目的で、「Society5.0科学博」(東京スカイツリー)※2を開催しました。共同主催の内閣府や、広告代理店等多くの機関との総合調整を通じて、異分野の人脈も広く構築できましたし、SNSの反響もあって充実した仕事でした。

さて、JAMSTECは毎年約300億円を国から頂いていて、原資は国民の税金です。仮に納税者が1億人だとすると、単純計算で毎年300円ずつになります。私はこれを勝手に「300円プロ」と呼んでいるのですが、しっかりそれに応え、仕事に真心を込めるようにしています。

最後に、現在の業務を紹介します。STEAM教育を通じて、次世代の海洋人材育成につながる「海洋STEAM事業」です。これまでの活動で得た豊富な画像や映像を使ってSTEAM教材を制作し、学校の授業で利活用します。学習指導要領に沿うので、子供たちが学校の授業を通じて海のことを学びます。将来のことを考えれば、この取り組みは継続する必要があります。数年から数十年後に、この教材で学んだ子供が、海の方で国や社会に貢献する人材になるといいですね。

私は、産学連携担当者として勤務しています。

JAMSTEC入職前は、「産官学」それぞれの立場で、研究成果の実用化・事業化、技術ベンチャー企業の経営支援などに携わってきました。現在は、国内機関、自治体、大学等との連携推進業務、機構の研究成果の実用化や事業化創出促進、JAMSTEC発ベンチャーの起業支援業務に主に従事しています。

私はJAMSTECに入る前から、研究成果を技術移転して実用化や新規事業創出に繋げることや、研究開発プロジェクトマネジメント運営に携わってきました。そのような経験を通して、自らの研究成果を社会に還元したいという思いを持つ研究者の近くで伴走し、その思いと一緒に実現したいと考えるようになりました。

私の仕事は外部との調整や交渉業務が多いこと、社会人時代にアメリカ留学した際にネゴシエーションの授業を受けたり、自己研鑽のために受けた外部研修で契約交渉を学んだ経験から、普段から他人より交渉事には慣れていると思うのですが、プライベートでもたまに「交渉スイッチ」が入ってしまうことがあります。ただ、交渉事はやはり疲れますから、プライベートではなるべくスイッチが入らないように心がけています(笑)。

JAMSTECでは現在、組織的に研究成果の実用化・事業化を加速させるための仕組みや体制づくりに取り組んでいます。これは私の夢でもあるのですが、JAMSTECが多数創出している唯一無二の研究成果や技術を、様々な手段や環境を通して地球上の社会課題解決に繋がる形で実用化・事業化し、「こんなところにもJAMSTECの成果が使われているのか!」「あのプロジェクトはJAMSTECの技術を基に起業したのか!」という事例を増やしていきたいと考えています。



AI
NEMOTO

【事務職】
海洋科学技術戦略部
対外戦略課

根本 藍
2013年度入職



【事務職】
経営企画部
企画課

笠原 敬弘
2013年度入職

私が所属している未来戦略課は、昨年8月に経営戦略課から改組され、業務内容にも少し変化がありました。経営戦略課時代からの業務である、国の海洋関連政策やJAMSTECの戦略・方針に関する調整・対応などに加え、新たにシンクタンクや外部とのインターフェースとしての役割が期待されています。シンクタンクの設置は、時には海外にも出向いて情報収集・分析を行い、JAMSTECから政策提言をしていこうという狙いがあります。これは昨年8月から始まったことで、JAMSTECでは前例がありません。今まさに道を切り拓いているところです。

JAMSTECはサイエンス、テクノロジー、アドミニストレーションが三位一体となって動いている組織で、どこか一つが欠けても成り立ちません。私はアドミニストレーション側の人間ですが、業務では、自分よりもキャリア、知識、経験いずれも非常に上の研究職や技術職の方とやり取りする場面も多々出てきます。その時に、「自分はまだ入職4年目だ」ということは考えていられません。主体性を持ち、自ら考えて行動しなければ、自分がそこにいる意味がありません。上長から言われたことをただこなすだけにはならないよう、常に考えて行動しています。

この部署に異動してから、国の海洋関連政策にダイレクトに関わる機会も増えましたし、やりがいも一層大きくなりました。未来戦略課は、現在国が力を入れている自律型無人探査機(AUV)戦略にも関わっていますが、「自律型無人探査機(AUV)戦略プロジェクトチーム」の中間報告書には、我々が作成した資料が参考として含まれています。それが国のホームページ※1に掲載されたときは、情報収集として一つ成果が出たということなので、やはり嬉しかったです。

今後の目標は、研究職と事務職双方の立場や苦勞を理解した、両者の架け橋となる事務職員へ成長すること、そしてまだまだ課題の多いJAMSTECの国際化推進に貢献することです。海外の方々を迎え入れることで組織の視野はもっと広くなると思っているので、それが実現できるような環境を整えていきたいです。

私は現在、機構の運営予算を国から獲得する「予算要求」という業務を担当しています。

国の予算は単年度主義と言って毎年国会の議決を経て認められるもので、予算が獲れないと継続すべき事業も止まってしまう。例えば現在機構では北極域研究船を建造中で、その建造費は総額約335億円ですが、全額一度に獲れるわけではなく毎年少しずつ要求し予算を獲得しています。既に契約も建造も始まっており完成は令和8年度と決まっているので、それまでに全額を確保しなければならないというのは一つのミッションです。また北極域研究船に限らず、機構が何をするにもその財源は国民の皆様の税金なので、皆様が税金の使い道として納得できるよう説明する責任もあります。

予算要求では私達のやりたい施策をまず機構の所管省庁である文部科学省に説明し、文部科学省が財務省へ要求する立場になります。これら政府に必要性を認めて貰うには、ただJAMSTECがやりたいと訴えるだけでなく社会的課題やニーズと繋げることが必要です。我々は要求を行う施策を「予算要求タマ」と呼んでいて、研究者等の要望や提案を核にしますが、そのタマを練って磨いて訴求力を高めるには専門家の知識に加え予算要求担当の経験と知恵、社会へのアンテナが不可欠で、これらを調和させより良い提案にするために対話も必要です。対話により、研究者に訊ねてばかりでなく要求担当の経験から政府の注目ポイントを伝えることで新しいアイデアが生まれることもあり、協働しているという強い一体感を得られますし、そうして苦勞し編み上げたタマがストライクを取って政府側の納得を得たり、更に予算化されたりした際の達成感はひとしおです。

JAMSTECでは若い人も裁量を持って活躍しています。

私も、ある分野では知識や経験の大小があっても老若や職種に関係なく誰もが違ような分野の知識・経験を積んでいて、その組合せは一人ひとり異なり唯一無二だと考えています。そして、だからこそ助け合える、学び合えると考えており、そういうマインドで何事も自信を持って取り組まれ、「困ったときはお互い様」と助け合える方と一緒に仕事をしていきたいと思っています。



KENTO
KIRYU

【事務職】
経営企画部
未来戦略課

桐生 健斗
2020年度入職

※1 <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kaiyou/sanyo/20230329/>

Q 大学時代はどんな学生だった？

築田 私は体育会系のバスケ部だったので、部活、部活、部活ちょっと勉強、みたいな感じ。

永田 私は学部生のときも院生のときも休日も含めて研究しかしてなくて、エピソードは研究しかない。

稲澤 え？今の話の後に私が話すの？(笑)。(一同笑)

稲澤 私は永田さんと同じで修士まで出てるんですけど、学部生の頃はワッダーフォーゲル部に入っていて、中国山地や四国山地、夏休みには日本アルプスなんかを登ってました。院に入ってから地球科学の勉強の楽しさを知ったかな。



Q 1年目から即戦力！！

稲澤 JAMSTECって多分民間の企業に比べると初任者研修が短いというか、即現場に配属みたいな感じで。

築田 研修、2日間くらいしか無かったよね。

永田 研修期間は短かったけど、その代わりにOJTリーダーがすごく丁寧に業務を教えてくれたから、仕事を進めるうえで何もわからないってことは1度もなかったと思います。

稲澤 私はOJTリーダーと同じグループだから、今でも何かあると聞きに行っていて、お世話になってる。

築田 OJTリーダー以外にも同じ部署の先輩とか、上司がすごく気を配ってくれるよね。

※OJTリーダー……新卒をマンツーマンで指導してくれる先輩。JAMSTECでは1年間、OJTリーダーが新入職員の指導をしてくれる。

稲澤 私は技術職で、JAMSTECが持ついろいろなデータの連携や提供を行うという部署にいますけど、1年目からこんなバリバリ運用しているサーバーに入っているんですか？今、私がこのコマンドを打ったら全部止まりますけどいいんですか？みたいな時はあります。やらないですけど！

永田 経理はルーティンワークが多いというイメージがあると思いますが、近年の様々な法改正に対応するにあたって、既存の業務フローを見直したり、1からフローを考えるという場面も結構ありました。私は理系の学部出身なので、入職当初は経理の知識が全くありませんでしたが、新卒の、経理の知識が全くない私もその議論の場に入れて、意見に耳を傾けてくださったことには驚きましたし、そこで決めたフローが今後、機構のスタンダードになるという部分は、やりがいも感じられるところなのかなと。

築田 会議で話してる内容分かる？

永田 最初は全然。会議に出て会話に出てくる単語の意味が何も分からなくて。OJTリーダーに教えてもらったり、自分で調べたりしてうちに、徐々に内容が理解できるようになって、そこから自分の意見を持てるようになっていったかな。



CROSS TALK 「入職2年目の先輩職員に聞く！JAMSTECってどんな職場？」

Q JAMSTECは働きやすい？

築田 めちゃめちゃ休みが取れる。

稲澤 夏休みとかも取りやすいし、有給休暇も取りやすい。若手だからとかじゃなくて、管理職も休んでる。

築田 上の立場の人が休みを取ってるから、自分も休みが取りやすい。

稲澤 実際に同じグループの上司や先輩でも夏休みとかだと土日込みで10日くらいいっちゃらないときもあります(笑)。

永田 産休から復帰された先輩とかでも、小さいお子さんのご体調が悪い日とかは柔軟にお休みされていますし、フレックスタイム制度があるので、「子どもを保育園に送ってから出勤します」とか、「今日は子どものお迎えに行くから早く帰ります」という方もいらっしゃるし。子育てしながら働くという意味ではとても良い環境だと思います。

稲澤 私のグループにもお子さんがいらっしゃる方がいますが、フレックスタイム制度を使って、「今日はここで帰ります」って早く帰って、翌日長く勤務するとか。柔軟に対応できるんだなって。周りの人も「ああいいよ。あとはこっちでやっとくから」みたいな。

永田 私自身もフレックスタイム制度を使って病院に行くこともありますね。

築田 それある！自分も仕事終わりに通院しやすい！

Q 職場の雰囲気・人間関係は？

永田 若手が少ない職場なので、先輩方も気に掛けてくれるし、横の繋がりがりだけでなく縦の繋がりがりもかなり多いよね。

稲澤 優しい人多いよね。

永田 穏やかな人が多いよね。

築田 のどかだよな。

永田 人も職場も。

稲澤 服装も自由だよな。研究者の人とかTシャツに短パンだし(笑)。



Q JAMSTECを目指す就活生へのメッセージ

永田 JAMSTECを目指すかどうかは一旦置いて、就活は自分自身と向き合える貴重な機会だと思うので、この機会に色々な企業のインターンや説明会に行き、自分自身が一番やりたいことを見つけたいのがいいのではないかと思います。そして、その結果としてJAMSTECで働きたいと思っていただけたらすごく嬉しいです。

稲澤 大学生って、あまり自分のことについて日常生活で深掘りする機会ってないと思うんです。でも就職活動を通じてエントリーシートを書いたり、面接対策して深く自己分析する、それってすごく大事だなと思っていて。仕事って平日は1日8時間ぐらい職場で過ごすので、生活の中で占める割合は結構大きいんです。自己分析で自分にとって何が一番優先順位が高いのかということを考えられると、納得のいく就職先が見つかるんじゃないかなと思います。

築田 JAMSTECに就職を目指すきっかけは本当に何でもいいんじゃないかなって思ってます。私自身、すごく海に詳しいでもないし、そういう研究をしていたわけでもなく、ただ「深海生物可愛いな」くらいの興味から始まったので、そんなに身構える必要はないかなと思います。どこの大学とか学部卒・大学院卒は関係なくて、就活の時にいいなと思う企業に、今まで自分がやってきたことを自分の言葉で面接官に喋ればそれなりにちゃんと……相手も人間なので(笑)、気持ちは伝わるかなと。それでJAMSTECにつながる人がいてくれたら嬉しいなと思います。



教育研修制度

Training



新入職員研修

入職後は、機構の基本的な事業内容・運営方針などに関する初任者研修や、ビジネスマナー研修を受講いただきます。その後は、配属部署で実際に業務経験を積んでいただくことになります。



OJT制度

入職後1年間は、新入職員1名につき1人の先輩職員がOJTを担当し、先輩職員と一緒に社会人としてのスキルや業務の知識など様々なことを学んでいただきます。



その他研修制度

他にも上位へのキャリアアップのため、若手職員から管理職を対象とした階層別研修、各職種及び業務に必要な専門的スキルを向上させるためのスキルアップ研修等の研修制度が用意されています。



海外研修制度

組織内で応募者を募り、審査を経て海外の大学や研究機関、行政機関等に職員を一定期間派遣する制度が用意されています。

福利厚生制度

Benefits

福利厚生について

各種社会保険(健康保険、厚生年金保険、企業年金基金、雇用保険、労災保険等)を完備しております。それ以外にも、借上社宅制度や赴任旅費の支給制度、職員の相互扶助及び福利厚生の増進を図るための共済会制度が用意されています。



借上社宅制度

民間賃貸住宅を社宅として借上げる(借上社宅)制度があり、最大8割の家賃を機構が負担します。また、借上社宅制度を利用せずご自身で賃貸物件等に入居する場合は、住居手当の制度が用意されています。



フレックスタイム制度

機構ではフレックスタイム制度を導入しており、7.75h×月の出勤日数が満たされていれば、コアタイムである13時～15時を除く7時～21時の間に出退勤可能です。



残業・休日出勤について

残業については部署により繁忙期がございますので、配属先や時期により状況は異なります。また、基本的には土日・祝日は休日となっておりますが、研究施設や船舶の一般公開・シンポジウム等のイベントや、乗船中などは休日出勤が発生することがあります。休日に出勤する場合には振替休日を取得していただきます。



出産・育児・介護に関する制度

産前産後休暇・育児休業制度等

産前産後休暇、育児休業制度等がございます。JAMSTECでは子供が3歳になるまでの間の必要な期間、育児休業の取得が可能です。育児休業については、男女問わず取得可能です。

産休・育休後について

産休・育休を取得したほぼ全ての職員が復職しております。復職後には、時短勤務や時差勤務、時間外勤務の制限等、育児と仕事の両立を支援する制度が用意されています。

介護に関する制度について

要介護状態にある家族を介護する場合、通算183日まで介護休業の取得が可能です。

数字で見るJAMSTEC

Figures

標準的なキャリアパス

事務職・技術職はおおよそ5年目～10年目で副主任、10～15年目前後で主任、それ以降は職員によりますがおおよそ20年目以降には副主幹、主幹(課長代理、課長級)に昇格します。昇格に係る男女の評価方法に差はありません。中には5年目で副主任、出向などを経験した後10年目で主任、15年目で副主幹、20年目で課長等、優秀な方はしっかり評価をされるシステムが備わっています。



入職5年後
定着率

100%



産休・育休
取得率

男女ともに

100%

【産休】
(特別有給休暇の育児休暇含む)

女性

100%

【育休】

男性

17%



職員の
男女比

女性
男性

約 1:5

(17:99)

【基幹技術職】

約 1:2

(55:91)

【基幹事務職】

(基幹事務専門職含む)

約 1:6

(31:178)

【研究職】

約 1:2

(246:467)

【全体】

(R5年6月30日時点・定年制&無期雇用)



有給休暇
取得率

48%

[取得日数:9.4日]

【研究職】

63%

[取得日数:12.2日]

【事務職】

63%

[取得日数:12.3日]

【技術職】

65%

[取得日数:12日]

【全職員】

(支援職等含む)

上記に加え、7月～9月の期間に連続の休暇取得が推奨される **夏期休暇** 制度(7日間)があり、ほぼ全職員が取得しています。
(有給休暇取得率算出方法:全職員の有給休暇取得日数計÷全職員の有給休暇付与日数計×100)



平均
残業
時間

9.8h

【研究職】

18.3h

【事務職】

17.0h

【技術職】

11h

【全体】

(支援職等含む)



転勤・出向

毎年数名が各拠点へ転勤(殆どが管理職級以上)、関係省庁に出向しています。また、入職直後は横須賀本部または横浜研究所に配属されます。



研究
成果

Top1%以内のものが

37件

(1.5%)

【特に影響度の高い論文数】

Top10%以内のものが

245件

(10.0%)

※2019～2022年に出版された機構の論文(2,441件)のうち被引用数